ウヤマイノシンボル

神社・仏閣などの神紋・寺紋・神額などを、ウヤマイ（敬い）のシンボルとして紹介しています。

武田菱や花菱などは複数の神社・仏閣などで使用されていますが、その多さもひとつの面白さとして、あえて掲載することにしました。
複数の紋（例えば表紋・裏紋があるなど）を使用しており、絞り込みが難しい場合などにおいて、シンボルの枠内に２つの紋を並べて表示している場合があります。また、反対に、複数の紋を使用している場合でも1つだけをシンボルとして取り上げている場合があります。

甲府には、今回掲載しきれなかったものも含めて沢山の神社や仏閣があり、数々の由縁があります。いつもより少し深掘りして尋ねてみるのも、いいかもしれません。

＜本項について＞

・紋については一部描画素材を使用しており、実際現地で使用しているものと若干の差異がある場合があります。

・山梨県神社庁様の協力により、複数の写真を山梨県神社庁 HP(http://www.yamanashi-jinjacho.or.jp) よりお借りしています。

・本書内に掲載されているシンボル・画像・イラスト・文章・データ等の無断転載および無断転用をかたく禁じます。

・シンボルおよび画像の著作権・所有権・商標登録における権利等は、所有者（または貸出主等）に帰属します。

・上記、著作権等の権利やその他本書に関するご不明な点におかれましては、コウフシンボル 500 制作委員会（メールアドレス：kofulifelab+ks500@gmail.com）へご連絡ください。

青沼浅間神社

江戸　明治　大正　昭和　平成

青沼3丁目5-2

青沼浅間神社の桜の神紋。正式名は浅間神社のようだが山梨県には浅間神社が多いためか、鎮座地名を冠して「青沼浅間神社」としているよう

桜の花を図案化した紋。桜は山から降りた穀霊が宿り、田植えの時期を知らせる花として、木花咲耶姫の化身に見立てられた。また、初めて桜の種を日本に蒔いたのは咲耶姫だと言われており、咲耶姫の名前から「桜(さくら)」と言う名前が付けられたとも言われている。浅間神社は祭神が木花咲耶姫にちなんで、神紋にしており、賽銭箱や神楽殿、社殿のあちこちに桜紋が付けられている。青沼浅間神社は貞観7年(西暦865年)、山梨郡稲門東青沼村の現在地に創建された。古くは野良浅間神社と呼ばれ、武田氏をはじめ、所在の武家の信仰が厚かったという。

安産・防火・厄災除け・家内安全・交通安全・婦道の神。
貞観6年(西暦864年)、富士山が噴火する貞観大噴火を受け、鎮祭のため創建された名神大社「甲斐国八代郡浅間神社」の論社とされている。

YT

愛宕神社

江戸　明治　大正　昭和　平成

愛宕町134

甲府駅北口から北東の愛宕山のふもとに位置する。御祭神は火之迦具土神、建御名方神、日本武尊

由緒沿革は山梨県神社庁によると、創始年代は不詳であるが、武田信玄の命によって古府中日影村聖道小路の地に鬼門守護として奉祀されていた。後に徳川家康公が当国を領国し舞鶴城を築城するに際し、天正十二年(西暦1584年)現在の地へ勧請奉斎され、甲府城の鬼門守護神として朱印黒印を受けた。歴代城主の崇敬が厚く一国一社愛宕権現勝軍地蔵などと称されて崇敬されていた。明治初年村社に列格する。と書かれている。

愛宕神社は明治以前には「愛宕権現(社)」、「愛宕勝軍(大)権現」、「愛宕勝軍地蔵権現」などと呼ばれていた。相模国の愛宕山より持ってきた地蔵菩薩を安置したことが始まりと伝えられている。

YT

穴切大神社

江戸　明治　大正　昭和　平成

宝2丁目8-5

穴切大神社は甲府市にある神社で、甲斐国湖水伝説や、蹴裂伝説などの伝説などを持つ

創建は和銅年間(8世紀初め)とされ、太古の昔に湖であった甲府盆地が山を切り崩して水を落とす事で陸地化されたという甲斐国湖水伝説・蹴裂伝説を由緒として掲げる神社。当初は黒戸奈神社と称したが、後に朝廷から「穴切大明神」の神号を賜ったとされる。また、甲府城築城後は甲府城坤方の御門・穴切御門として人々に知られ、明治六年(西暦1873年)郷社となる。一間社流造(いっけんしゃながれづくり)桧皮葺(ひわだぶき)の御本殿は桃山時代の建築として昭和10年に国宝(旧国宝)となり、戦後改めて国の重要文化財と指定され現在に至る。

穴切大神社の本殿付棟札は歴史が感じられるだけでなく昔の建築の技術力の凄さも感じることができる建物である。

DN

稲積神社

江戸　明治　大正　昭和　平成

太田町10-2

稲積神社の名の通り稲がモチーフとなった神紋がデザインされたお守り。多くの人が安産祈願に訪れる

正ノ木稲荷大明神を祀り「命継ぐ食もの衣もの住むいえも稲荷の神の恵」の言葉に倣う、衣・食・住を司る生活の守護が鎮座する稲積神社。言い伝えでは今から約2080年前、上古時代湖沼地帯であった甲府盆地を切り開き、湖水を富士川に落として涸燥し、田圃を造り「蒼生愛撫」「五穀豊穣」祈願のため丸山(現在の舞鶴城址)に奉斎された湖水伝説にゆかりのある神社といわれている。江戸時代前、甲府城(舞鶴城公園)築城の際、一条小山にあったものを一蓮寺とともに太田町に移した。京都にある伏見稲荷を本宗と仰ぎ「五穀豊穣」、「商売繁昌」、「飲食業繁栄」の御神徳がある。

甲府市の遊亀公園に隣接する稲積神社。雅楽が流れ厳かな雰囲気が漂う。境内には御神水と呼ばれる地下136メートルから湧き出る井戸水があり、採水が出来る。また御朱印帳は季節により限定頒布されるものもある。

YT

宇波刀神社

江戸　明治　大正　昭和　平成

宮原町1265

「うわとじんじゃ」、または「うばとじんじゃ」と呼ばれ山梨県内では、他に韮崎市と北斗市に鎮座する

創建年代は非常に古く、延喜式では甲斐国の式内社に列せられ、寛治年間(西暦1087～1094年)に新羅三郎義光が再建、保元元年(西暦1156年)に鎌田兵衛尉正清が再々建し、鎌田氏との関係を深めた中で鎌田庄十六七か村の惣社氏神とされている。
武田氏(信虎)全盛の頃、源氏の氏神である石清水八幡宮にあやかり、八幡宮と改称。その後、代々の徳川家将軍より朱印状を賜り、近世には宇波刀神社とも称していた。明治になり郷社に列せられた。

『甲斐国志』には「八幡宮 宮原村 鎌田總社 宇波刀神社」と記述があり、別称として「八幡宮」と呼ばれている。祭神は八幡の神々と伝わっている。

YT

円光院

江戸　明治　大正　昭和　平成

岩窪町500-1

円光院は戦国期に武田信玄が制定した甲府五山のひとつで、信玄正室三条夫人の菩提寺として知られている

円光院には武田晴信(信玄)継室の三条夫人の墓所があり、史跡名を「武田晴信室三条氏之墓」という。円光院には多くの文化財があり、山梨県指定文化財の有形文化財、「木造刀八毘沙門天及び勝軍地蔵坐像」や甲府市指定文化財の有形文化財、「円光院天目茶碗・赤絵碗」や打敷(工芸品)や円光院文書13点(書跡)などとても歴史的に重要なものが残っている。
祭礼・行事としては、春の花まつりや大晦日に行われる除夜会など、人々の集う場所としてもとても良い環境の寺院になっています。

歴史や文化財も数多くあるうえに、美しい建物がある寺院。
三条夫人の墓所には花菱が刻まれている。

DN

塩澤寺(えんたくじ)

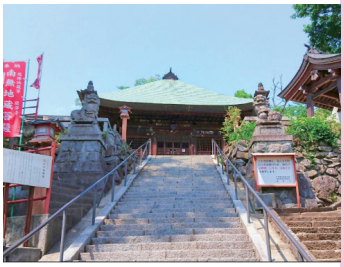
江戸　明治　大正　昭和　平成

湯村3丁目17-2

毎年2月13日に行われる厄除け地蔵尊大祭で知られており、地元では厄地蔵さんの名で親しまれている

厄除地蔵尊福田山円澤寺は湯村山の南麓に立地し、南には湯村温泉が所在している。「甲斐国社記・寺記」によれば、大同3年(西暦808年)に空海が開山し衆生救済のため諸国行脚された折に、当地にて厄除地蔵大菩薩の霊験感ぜられ大師自ら六寸余りの座像を彫刻され、その尊像をご開眼されたのが開創という。また天暦9年(西暦955年)に空也が開祖であったと伝わる。さらに「寺記」によれば、鎌倉時代には蘭渓道隆(らんけい どうりゅう)が中興開山となり、諸堂を再建したという。「西山梨郡誌」所収の天正3年(西暦1575年)武田家印判状では、武田氏から諸役免除を受けている。

「厄地蔵(やくじぞう)さん」は春を呼ぶおまつりとも言われ、毎年2月13日昼12時より2月14日昼12時まで大護摩供を行い、開運厄除・家内安全等を祈る。百余の軒を連ねる露店が並び、参拝者の数は十万人といわれるお祭りである。



YT

甲斐善光寺

江戸　明治　大正　昭和　平成

善光寺3丁目36-1

開基武田信玄公が、川中島の合戦の折、信濃善光寺の焼失を恐れ、永禄元年(西暦1558年)、御本尊善光寺如来をはじめ、諸仏寺宝類を奉遷したことに始まる

甲斐善光寺は開基武田信玄公が、越後国の大名である上杉謙信と争った川中島の合戦の折、信濃善光寺の焼失を恐れ、永禄元年(西暦1558年)に御本尊善光寺如来をはじめ、諸仏寺宝類を奉遷したことに始まった。甲斐善光寺の建つ板垣の郷は、善光寺建立の大檀那本田善光公を葬送した地と伝えられていて、信濃より大本願上人以下、一山ことごとくお迎えした。その後、武田氏滅亡により、御本尊は織田・徳川・豊臣氏を転々としたが、慶長3年(西暦1598年)信濃に帰座した。
その後は新たに、前立仏を御本尊と定め、本坊三院十五庵を有する大寺院として浄土宗甲州触頭を勤め、徳川家の位牌所にもなったという歴史がある。

左）甲斐善光寺にある宝物であり、日本最古の源頼朝木像。信濃善光寺を復興した大檀那として知られていて、信州・甲州の善光寺には、かつて源三代将軍堂があった。この木像はそこで祀られていた。右）長野の善光寺と同じ立葵の紋も存在する。

IO

甲斐奈神社

江戸　明治　大正　昭和　平成

中央3丁目7-11

社殿各所にみられる桜に巴紋のご神紋。写真は屋根瓦のもの。「甲斐奈」を社名とする神社は山梨県内に三社、甲府市と笛吹市春日居町、笛吹市一宮町にある

神社の北方に立つ愛宕山は、甲斐奈神社では「甲斐奈山」と称している。その山頂に鎮座していたが、永正年間(西暦1504～1520年)に武田信虎により蔵田に移された。その後、天文年間(西暦1532～1555年)に長禅寺が現在地に移るとともにその境内に移されたとされている。

古くは「白山権現」「白山神社」と称していた。その関係で現在の祭神は菊理姫命としているほか、文禄年間(西暦1592～1596年)に東青沼から浅間神(木花咲耶姫命)が移され、ともに祀られている。慶応4年(西暦1868年)から現在の「甲斐奈神社」を称しているという。

境内には子どもを乗せて無事を祈る「子育て石」や「夫婦銀杏」がある。

かつて本殿後ろには天然記念物の御神木の大杉があった。甲州三大杉の一つに数えられていが、現在は記念碑が建ててある。

YT

金櫻神社

江戸　明治　大正　昭和　平成

御岳町2347

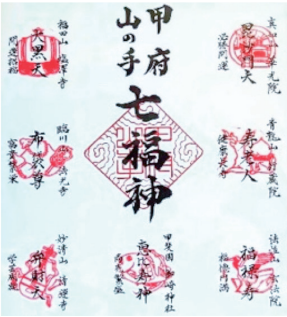
その名の通り桜を配した神紋の金櫻神社。甲府北側、昇仙峡を登りつめた地に鎮座する金峰山を御神体とした神社である

御神体は金峰山であるため、山頂にある奥宮と、山里にある里宮からなる神社。その歴史は約2000年前に遡り、第十代崇神天皇の頃、各地に疫病が蔓延した折、諸国に神を祀って悪疫退散と万民息災の祈願をし、甲斐の国においては金峰山山頂に御祭神である少彦名命(すくなひこなのみこと)を祀ったのが起源とされる。御神宝はこの地で発掘され磨き出された水晶「火の玉・水の玉」で、本殿には昭和30年の大火により焼失後、復元された「昇・降竜」が奉納されている。

名前の由来でもある御神木の「金櫻」(種類は鬱金桜)は古くから民謡に唄われている「金の成る木の金櫻」として崇められている。

パワースポットとしても人気で全国各地から参拝者が訪れる。
春には淡い黄金味を帯びた櫻が満開となる。この季節にこの櫻を拝み水晶のお守りをうけると一生涯、金運に恵まれ、厄難解除のご神徳をうけられるとか。

DN



甲府山の手七福神

江戸　明治　大正　昭和　平成

甲府市北部7寺社

集合御朱印。こうふ開府500年・改元という節目の年に甲府北部七寺社にて七福神を祀り「甲府山の手七福神」を開創、たくさんの人が訪れている

「甲府山の手七福神」は7つの寺社を巡って御朱印を集める探訪型イベント事業。七福神をめぐり開運招福を願いながら、甲府の町に親しみを持ってもらう狙い。七福神とは、毘沙門天・寿老人・福禄寿・恵比寿神・弁財天・布袋尊・大黒天の7つの神様の総称。七福神を巡拝すると、7つの災難(太陽、星の異変、風水害、火災、干ばつ、盗難)が除かれ、7つの幸福(威光、寿命、人望、清廉、愛敬、度量、富裕)が授かると言い伝えられている。7寺社を巡る所要時間の目安は約120分。

七福神の各寺院は以下の通り。
華光院・毘沙門天、行蔵院・寿老人、玄法院・福禄寿、御崎神社・恵比寿、清運寺・弁財天、法光寺・布袋尊、塩澤寺・大黒天。御朱印用特製台紙で7か所巡りを成満すると記念品の木守りが授けられる。

YT

酒折宮

江戸　明治　大正　昭和　平成

酒折3丁目1-13

桐の葉と花を形象化した五七桐を神紋とする。酒折宮は山梨県で唯一、古事記、日本書紀に記載のある古い神社

古代中国で「鳳凰が棲む」という謂れのある桐は、日本でも嵯峨天皇(平安初期)の頃から天皇の衣類の文様に用いられるなど、菊紋章に次ぐ格式のある紋とされた。室町幕府のころから徐々に皇室から臣下、さらに戦国大名へと下賜されていったが、特にこの「五七桐」は、桐紋の中でも最上位と言われるほどに格式が高いもので、下賜する時はそれより下の「五三桐」であることが多かったようだ。

酒折宮が五七桐を神紋とするのは祭神が日本武尊であること、その歴史、格式の高さからではないかと考えられる。

酒折宮の神額。シンプルな額に独特な書体が特徴的。
日本武尊が東夷征伐の帰りに立ち寄った際の御火焚の者との問答歌のやりとりが日本における連歌の起源とされ「連歌発祥の地」と言われている。

SK

柴宮神社

江戸　明治　大正　昭和　平成

善光寺2丁目8-20

ご神紋は丸に橘。江戸時代初めに定められた「甲府五社」の内の一社。甲府五社は、穴切神社・古府中八幡神社・甲斐奈神社・住吉神社と柴宮神社

明治維新までは甲斐国山梨郡万力筋板垣村正一位柴宮大明神と称し、古来より板垣村外一村五町の産土神として奉祀された府中五社の一社。文禄年間(西暦1593～1596年)の甲府城建設にあたり、浅野平右ヱ門吉明殿から前記府中五社に対し、築城の地鎮祭の仰せがあり、五社五業の神事を執行したと古記にある。慶長8年(西暦1603年)に御神領御朱印地を受けさらに、正徳5年(西暦1716年)神祇管領長から正一位の神位を受けた。本神社に相殿として玉諸神社を合祀してあり、この奥宮として本神社の東北、御室山に石祠を建て大祭には祭祀している。明治初年(西暦1868年)、村社に列した。

古い記事文献によると、天変地異の際に山が鳴るとされており、「地変のあるときこの山鳴動す」と伝わっている。御祭神は、櫛稲田姫命、脚摩乳命、手摩乳命。

YT

青松院

江戸　明治　大正　昭和　平成

山宮町3314

甲斐武田氏ゆかりの古刹。曹洞宗光沢山 青松院の開基は大永2年(西暦1522年)、紀州太守信章(武田伊春：ただはる)公である

武田信章公は祖先である山宮信安が館を構えていた場所に、時の第15代甲斐守護職、武田信虎の助力を得て一ヵ寺を建立大栖禅師を開山と迎え、山宮一族の菩提寺とした。これが青松院のはじまりといわれる。武田歴代の守護を受け、徳川に政治が移っても 幕府の庇護を受けて現代に至った。
昭和38年に寺院の再建が進められ、同時に荒廃していた庭園の新作庭作業が着手された。本堂の北側の松嶽庭は、日本庭園研究会の吉河功会長が、青松院創建時の室町時代様式の曲水式池泉をテーマとして計画にあたったとされ、足利義晴を迎えるために築庭したと伝えられる室町時代の名園旧秀隣寺庭園(滋賀県)を更に豪華にした作庭である。

青松院には見応えのある庭園が広がっている。豊富な湧水と近隣の敷島町亀沢からの安山岩を利用して作庭された本庭は、室町式石組として中央に渦巻式石組を用い、伝統的な鶴亀島も構成している。

YT

住吉神社

江戸　明治　大正　昭和　平成

住吉1丁目13-10

奈良聖武天皇の時代に高畑にて鎮座。後に武田家が舞鶴城に勧請した。江戸時代、文禄年間に住吉へ遷祀される

甲府盆地が開けた時、肥沃の地を高畑と名づけ村作りをした。幾度か洪水に襲われ、奈良朝聖武天皇の天平時代に災害除けと五穀豊穣、村の繁栄を祈願し氏神としたのが住吉神社である。
高畑地区の神社境内にある御神木大欅は樹齢千年とも称される。また住吉地区の神社は、現在の舞鶴城に甲斐源氏武田太郎信義公神託により勧請され、武田家代々の軍陣守護の神となる。その後、浅野長政が甲府城を築城するにあたり江戸文禄年間に現在の地において遷祀された。

高畑地区の住吉神社は県下でも特に古く由緒ある神社である。住吉地区の住吉神社では夏季例大祭に、御田植神事という田植えの伝統行事が行われる。

YT

諏訪神社(下帯那)

江戸　明治　大正　昭和　平成

下帯那町2005

諏訪神社は、全国に約25,000社ある諏訪大社を総本社とする神社。神紋は梶の葉

諏訪神社は狩猟神事を行っていたことから狩猟、漁業を守護する神社としても崇拝を受け、広く日本中に祀られてきた神社である。長野県諏訪湖近くにある諏訪神社の総本社諏訪大社の歴史は古く、戦国時代まで遡る。その系統を汲む下帯那の諏訪神社は五穀豊穣の神様として大永2年(西暦1522年)諏訪山に祀られ、その後江戸時代の宝暦12年(西暦1762年)、現在の地に社殿が建てられたと伝えられる。旧社殿は文化8年(西暦1825年)に焼失、翌年に再建されたものがま現在の社殿である。明治6年(西暦1873年)には郷社となり、下帯那の人々を見守ってきた。

下帯那地区では諏訪神社を舞台に「お洗垢雛(おせんごろ)まつり」という秋祭りが毎年行われている。夜、提灯を持った村の若者たちが下帯(ふんどし)姿で川の中に入り「お洗垢雛の詞」という詞を3～4回唱えたあと山を駆ける。地域に根差す伝統的な行事である。

EI

大神宮
(横近習町大神宮、柳町大神宮)

江戸　明治　大正　昭和　平成

横近習町大神宮：中央2丁目
柳町大神宮：中央4丁目

毎年2月3日節分に甲府三大祭りの一つ大神宮祭、通称『大神さん』が行われる2つの大神宮は同じ神紋を用いている

大神宮は寛治年間(西暦1087年～1094年)新羅三郎義光ご任国の節、これに従った神宮御師幸福出雲の奉請により創建。文禄年間浅野公築城に際し現地に遷座。伊勢屋敷、出雲兼帯所として、甲斐国一円の大麻、暦頒布の事を司ったとされる。戦災により焼失したが、昭和二十六年再建、昭和五十三年神宮様式に倣って社殿造営現在に至る。

右は横近習大神宮、左は柳町大神宮。『大神さん』では付近の通りが通行止めとなり、鬼が歩き、豆まきも行われ、夕方から夜遅くまで賑わう。沿道には達磨や熊手などの縁起物を始め、切りざんしょう、飴などを売る露店もたくさん立ち並ぶ。

YT

甲府 大泉寺

江戸　明治　大正　昭和　平成

古府中町5015

曹洞宗寺院で、山号は万年山。御朱印の左下の部分には武田信玄の家紋である武田菱が描かれている

武田信玄の父親である武田信虎公之墓がある大泉寺。
大泉寺は大永元年(西暦1521年)、武田信虎が開基、天桂禅長を開山として開創された禅寺である。
信虎が信州で没したときにその遺骸を国元に送り、ここに埋葬した。この寺も戦災ため法堂や庫埋などが焼失したが、幸いにして武田三代の霊廟、総門、宝蔵は火を免れることが出来、境内にある霊廟には信虎、信玄、勝頼の三代の肖像らが安置されていて、武田氏について多く知ることが出来る。
また、見事な門と境内までの参道はとてもおもむきがあり、心が安らぐ雰囲気を楽しむことが出来る。

大泉寺にある武田信虎之の墓標。同国岩村田(現 長野県佐久市)の竜雲寺から大禅師北高全祝が招かれて信虎の葬儀を執り行った。

EI

武田神社

江戸　明治　大正　昭和　平成

古府中町2611

武田神社の絵馬はご神紋と同じ菱形となっている。御神門甲斐の国の総鎮護として多くの歴史をもち武田信玄公を御祭神として祀る甲府を代表する神社

甲府駅からの1本道武田通りを北に進むと正面に鎮座する武田神社。甲斐の国の名将、武田信玄公をお祀りしている神社で、甲斐武田氏3代、信虎公・信玄公・勝頼公が60年余りにわたって国政を執った「躑躅が崎館跡(武田氏館跡)」に、大正8年(西暦1919年)に創建された。境内には当時からの濠、土塁、石垣、古井戸等が残り、宝物殿には国指定重要文化財の「太刀銘『一』」をはじめ、武田氏ゆかりの、また往事を偲ばせる鎧・甲冑・刀剣などが展示されている。境内は創建時に県下各地より奉献された樹木により四季折々の様相を見せ、春には綺麗な桜を、秋には赤、黄に染まった紅葉を楽しむことができる。

「勝運」のご利益が受けられるとされ「信玄さん」として地元の人々が親しみ、崇拝する。また、県外からも多くの人が参拝する。

DN

玉諸神社

江戸　明治　大正　昭和　平成

国玉町1331

玉諸神社の三引き両紋。社伝によると、古くは酒折宮北方の御室山に鎮座していたが、日本武尊東征の折に現在地に遷座したという

引両紋の線は“竜”をあらわし、二本の場合は二匹、一本の場合は一匹の竜が天に昇ることを意味しているという。竜は古来、雨の神として尊敬されており、日本武尊が御室山から現在地に神社を遷したのは大雨が降れば洪水に苦しむ甲府盆地の水害防止の為という説から、引紋を神紋としたのも、そのような霊力にあやかろうとしたものかもしれない。
当時、大水害の水防祈願を行う神社として甲斐国の一宮に浅間神社(旧一宮町)、二宮に美和神社(旧御坂町)も置かれたとされ、玉諸神社は三宮ということで三引き両紋を用いていると考えられる。

境内の入り口には美しい朱の鳥居。春には神社をぐるっと囲んで桜が咲く。社殿の屋根には葵の紋がある。これは武田氏滅亡時に兵火で焼失したが、その後徳川家の保護を受け、再建されたためと記されている。

SK

能成寺
(のうじょうじ)

江戸　明治　大正　昭和　平成

東光寺町2153

能成寺は臨済宗妙心寺派の寺院で、山号は定林山。本尊は釈迦如来。甲府五山のひとつ

能成寺は貞和年間(西暦1345～1350年)に甲斐守護・武田信守公が開基となり、業海本浄(ごっかいほんじょう)禅師を開山として八代郷に開かれ、のち現在地に移転したお寺。
甲府五山の一つでもあり「信玄の制札」、「加藤光泰禁制」など多くの古文書が残っている他、赤穂浪士・大野九郎兵衛の墓や芭蕉の「名月や 池を廻りて夜もすがら」の句を刻んだ碑などがある。
能成寺には歴史的な古文書や建物があり古き良きを感じることができます。4月の中旬ごろからは牡丹の花が見頃を迎えるため、春には多くの人々が訪れるお寺になっています。

門をくぐると、静かに落ち着いた時間が流れている。

DN

原山神社

江戸　明治　大正　昭和　平成

美咲1丁目187

神額。別名うなぎ神社と呼ばれ、例祭の8月26日には「ウナギの放流」がされる。諏訪大社の御射山祭「原山様のウナギ放流」に縁付く

遠い昔、塩部で疫病が流行り、薬が一向に効かず人々を悩ませていた。その時この地を訪れた行者が「とても体の長い動物の祟りだ。この動物は生霊だから相川の袂にある祠に生きたうなぎを捧げなさい。そして穢れを祓い清めたら相川に放流しなさい。」と言って去った。村人がさっそく実行すると、数日後まもなく病気が治った。この話を後世に伝承するために建立されたといわれている。
原山神社は南アルプス市の上今諏訪諏訪神社と何らかの繋がりがあるともいわれており、長野県の諏訪大社との縁も深いという。うなぎの言い伝えは大変興味深い。

うなぎの絵の絵馬は氏子一同によって奉納されたもの。社殿は「元三日公会堂」「老人憩いの家」としても使われており、地域に密着した神社であることが伺える。

YT

甲斐國総社八幡神社

江戸　明治　大正　昭和　平成

宮前町6-47

正式名称は、甲斐國総社八幡神社(旧県社)。御祭神は東殿・姫大神、中殿・誉田別命、西殿・息長足姫命。神紋は巴紋、御朱印には三つ巴と武田菱が並ぶ

神社にある營繕之碑によると承久年間(鎌倉時代、西暦1219～1222年)に武田信光(武田家七代目)が鎌倉の、鶴ヶ丘八幡宮を、信光の館「石和」の地に勧請誘致して甲斐の国八幡宮と稱した。その後、代々武田家の氏神として崇敬して武田信虎(信玄の父)が古府中に館を移すと一緒に、神社も隣地に遷座したという。
文禄年間(西暦1593～1596年)に武田家滅亡後豊臣秀吉の家臣浅野長政が、今の甲府城築城に際して古府中相川から「現在の地」に奉遷して城の鎮守甲斐國総社とした。

手水台には二つ巴も見られる。八幡神社は甲府市内の、富竹3丁目4-5、飯田4丁目9、千塚3丁目5-1などにも鎮座する。富竹は品陀和気命(応神天皇)、飯田地区は誉田別命、千塚地区は誉田別尊、帯中彦尊、息長帯姫尊を祀る。

YT

法泉禅寺

江戸　明治　大正　昭和　平成

和田町2595

臨済宗妙心寺派の寺院。山号は金剛福聚山。本尊は弥勒菩薩。甲府五山のひとつ

『甲斐国志』によれば、南北朝時代の元徳年間(西暦1329年～1332年)に、甲斐国守護・武田信武が開基となり、信武が帰依した月舟周勲を開山として創建。月舟は法師である夢窓疎石を開山とし、自身は二世と位置づけたという。寺名は境内にある金剛不動石と呼ばれる巨石に由来する。
信武の菩提寺となり『甲斐国社記・寺記』によれば、法泉寺文書には信玄・勝頼期の寺領安堵や禁制などの文書が残されているとされている。江戸時代には江戸幕府から朱印状を与えられ、武田氏に関する文書を所蔵。武田勝頼ゆかりの寺院として知られ、江戸時代の文政13年(西暦1830年)に勝頼250回忌に際して制作された甲冑姿の肖像が伝来している。

大晦日には門前で越年祭を行っており参拝者には御神酒などが振る舞われ、希望者は除夜の鐘を鳴らすことができる。

YT

御崎神社

江戸　明治　大正　昭和　平成

美咲2丁目10-34

国立甲府病院の南にあり隣に福寿禅院という寺社がある。御祭神は大國主神、保食神、稚産靈神が鎮座する

楼門をくぐると左手に「甲斐国 御崎神社」と刻まれた社号標がある。ここに刻まれている由来によると、初め甲斐の国主武田家の居館のあった石和郷に鎮座。今から400数十年前、永正16年(西暦1519年)武田信虎公が躑躅ケ崎に居城を構えた時、三の郭内に御遷座された。後に徳川氏の代になり文禄三年(西暦1594年)に甲府城を築いた際、現在の地に御遷座される。甲府城の守りと甲府北部一帯の氏神と定められる。甲府における大社の一つで氏子の家内安全、家業繁栄、安産の守り神、学問の守り神として崇敬され今日に至っている。

武田家が尊崇していた御崎神社は荘厳な楼門を構え、甲府城の守りを支えた。この地の地名である美咲は、御崎神社の御崎が後に変遷したものと思われる。また、太宰治が執筆の合間に立ち寄っていたと伝えられている。

YT

山梨縣護國神社

江戸　明治　大正　昭和　平成

岩窪町608

神紋が入ったご朱印帳。武田通りを北上し、武田神社の手前にある信号を右折すると見えてくる大きな鳥居、その先に鎮座する山梨縣護國神社。神紋は菊紋ではなく山桜である

明治12年(西暦1879年)に招魂社として建立されてから幾度か改称しつつ、西南の役に始まり大東亜戦争(第二次世界大戦)に至るまでの様々な国難に際し命を捧げて平和の礎となった山梨県出身並縁故ある殉国の御霊25062柱(令和元年時点)を御祭神としてお奉りしている。

終戦までは県民挙げて手厚く祈りを捧げてきたが、連合軍の占領政策で県との関係を断たれてから70年を超え、神社を支えてきた遺族会の方々も高齢化が著しい。平成を経て令和の新時代を迎えた今、ご家族と故郷を守るために尊い命を散らした英霊の方々に対し、改めて思いを馳せてみてはどうだろうか。

昭和21年、山梨縣護國神社は一度山梨宮に改称して、あらゆる職域において社会公共の為に貢献し顕著な功績を残した方々を御祭神に合祀することで、連合軍の占領政策によって取り潰されることを回避した。

DS

山八幡神社

江戸　明治　大正　昭和　平成

東光寺1丁目1-32

2羽の鳩が向かい合う神紋。山八幡神社は昭和2年に旧制度における村社から郷社に昇格された。御祭神は、足仲津彦尊、誉田別尊、神功皇后

建暦年間(鎌倉時代の初期、西暦1211～1213年)の創建当時は巨摩郡西八幡村(現在の甲斐市西八幡)に鎮座。永正16年(西暦1519年)に武田信虎が石和から甲府の躑躅ヶ崎に館を移した際に勧請して、愛宕山の採石用の石取場に遷座したと伝承されている。その後、文禄年間(西暦1592～1595年)に甲府城築城がされた際、社地を甲府城石垣の採石場とするため、現在の地に再度遷座している。

よく見ると、神額や瓦にも鳥の模様が施されている。境内には良純親王が命名された「妊懐石(天空図石)」と呼ばれる古代天体図岩として伝わる石もあり、石にはりゅう座アルファ星が北極とされていた時代の天体図が描かれている。

YT

湯谷神社

江戸　明治　大正　昭和　平成

湯村3丁目10

室町時代、湯村温泉が発見された頃に建てられた、との謂れをもつ

湯村温泉通りから細い路地に続く階段を上ると、山裾に立つ湯谷神社に辿り着く。湯谷神社は、秋葉権現、大宮さん、湯村温泉郷の守り神である湯谷大権現を合せて祭神として鎮座される神社である。

その歴史は大変古く、室町時代にこの場所に温泉が発見されたことで神社がつくられたとか、江戸時代・慶長6年の書にも湯谷権現としてその名が書いてあるという。

現在では、毎年夏に「湯村ふるさと祭り」が行われている。

深い歴史をもつ湯村温泉郷を見守り、地元の人たちに大切にされてきた神社である。

EI

積翠寺

江戸　明治　大正　昭和　平成

上積翠寺町984

甲府市街地北部に隣接する武田神社の北北東方向に位置し、要害山城のあった要害山の南西麓の標高約530メートルに位置する

宗派は臨済宗妙心寺派で山号は万松山。本尊は釈迦如来。『甲斐国志』によると開山は行基、夢窓国師の弟子竺峰が中興し、古くは石水寺と呼ばれたという。また『高白斎記』によれば、戦国時代には要害山に武田信虎が甲府市武田の躑躅ヶ崎館の詰城として要害山城が築城された。戦国期には武田氏が主催する和歌や連歌会が行われていた。寺宝として天文15年に後奈良天皇勅使として下向した三条西実澄・四辻季遠を招いて行われた句会の記録である『武田晴信和漢聯句帳』や、江戸時代に後陽成天皇皇子の八宮良純法親王が愛用したと伝わる硯箱・煙草盆が伝来している。

信虎嫡男の晴信(信玄)は永正18年(西暦1521年)に要害山城において誕生したとされ、境内には産湯を汲んだとされる井戸である産湯天神が残されている。

YT

【甲斐八珍果（かいはっちんか）】

ブドウ

ナシ

モモ

カキ

クリ

リンゴ

ザクロ

クルミまたはギンナン

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

江戸時代、甲斐の国で生産されていた代表的な８つの果物を甲斐八珍果（または甲州八珍果）といいます。今も昔もフルーツ王国ですね。
武田神社の菱和殿には、甲斐八珍果をはじめとした美しい天井画が描かれています。
（今回、武田神社様のご好意により、絵葉書の写真を掲載させていただきました。）